



「私が献血を続ける理由」

柳井学園高等学校3年 ひぐち 橋口 ひな 日菜

私は衛生看護科に通う高校三年生で、これまでに三度献血を経験しました。初めて献血に協力したのは、高校二年の冬でした。友人と一緒に献血ルームを訪れ、緊張しつつも「人の命を救う力になれるのなら」という思いで臨んだことを、今でもはっきり覚えています。

看護を学ぶ中で、輸血が医療現場で欠かせない処置の一つであることを知りました。事故や大きな手術だけでなく、白血病や再生不良性貧血などの病気と闘う患者さんにとっても、輸血は生きるために必要なものです。けれども、血液は人工的に作ることができず、一人ひとりの善意による献血に支えられています。その現実を学んだことが、私が献血をしてみたいと思うきっかけとなりました。

一度目の献血は、知識として知っていたとはいえ、普段目にする注射針よりも幾分か太い針を実際に見て、恐怖と不安でいっぱいでした。しかし、スタッフの方が優しく声をかけてくださり、いつの間にかそんな事は忘れ、気付いた時には終わっていました。献血後、「あなたの血液は、必要としている患者さんのもとへ届けられます」と書かれたカードを受け取り、自分の行動が誰かの命につながるのだと実感し、胸が温かくなりました。

二度目、三度目の献血は、緊張や不安よりも「また協力したい」という前向きな気持ちが強くなっていました。特に三度目の献血の後には、スタッフの方から「続けて協力してくださることが、とてもありがとうございます」と言葉をかけて頂き、社会の中で自分が果たせる役割の一つを見つけたような気持ちになりました。

献血を重ねる中で、私は「自分の体を知る」きっかけができました。事前の血液検査やバイタルサイン測定により、自分の血液状態、健康状態を確認できるため、普段の食生活や体調管理に対する意識も高まりました。健康でなければ献血はできません。つまり、献血は誰かを助けるだけでなく、自分自身の健康を見つめ直す機会にもなるのです。

また、医療を学ぶ立場として、献血の大切さを実感したことは、将来にも役立つ経験だと思っています。看護師を目指す私にとって、患者さんに安全で確実な輸血が行われている背景には、献血というボランティアの積み重ねがあることを理解するのは大切なことです。そして、患者さんやご家族に説明をする場面が来た時、「私自身も献血を続けています」と伝えられることは大きな自信につながるのではないかと感じます。

高校生として献血を経験し、同世代の協力が少ないことを感じました。少子高齢化により若い世代の献血の重要さが増す中、現実の重さを実感しました。初めは恐怖もありましたが、実際に体験すると、自分の少しの行動が確かに誰かの命の支えになっているのだと感じられ、継続にこそ意味があると知りました。

献血は誰でもできる身近な協力だという気付きを忘れず、今後も続けていきたいです。